

1 身体障害者の雇用状況

常用雇用身体障害者 39万6千人について、その雇用実態についてみていくこととする。

(1) 障害の種類・程度別

常用雇用の身体障害者を障害の種類別にみると、肢体不自由者が21万4千人で54.0%と最も高い割合を占め、次いで聴言障害が6万人、15.2%、内部障害者が5万9千人15.0%、視覚障害者が4万3千人、10.9%となっている。また、肢体不自由の中では下肢機能障害が10万5千人で肢体不自由の49.3%を占めている。障害の程度別には、重度障害者が13万2千人で33.3%を占め、中度障害者が15万1千人で38.2%、軽度障害者が9万7千人で24.5%となっている。

障害の種類と障害の程度別にみると、視覚障害者、聴言障害者、内部障害者では重度障害者が50%を超えているが、肢体不自由者では重度障害者が19.5%と重度障害者の割合が低く、中軽度の障害者の割合が高くなっている。

表1-1 障害の種類、障害の程度別

(単位：千人、%)

障害種類	千人	%	重 度	中 度	軽 度	不 明
全 体	396	100.0	33.3	38.2	24.5	4.0
視 覚	43	100.0	35.1	27.0	36.2	1.7
聴言障害計	60	100.0	54.0	26.9	12.5	6.7
聴 覚	48	100.0	61.9	23.8	12.4	2.0
平 衡 機 能	4	100.0	0.4	28.5	1.8	69.3
音声又は言語機能	8	100.0	35.7	43.8	18.3	2.1
肢体不自由計	214	100.0	19.5	45.2	33.0	2.3
上 肢 切 断	21	100.0	7.6	59.8	27.8	4.8
上 肢 機 能	57	100.0	33.4	39.3	25.9	1.4
下 肢 切 断	11	100.0	22.7	70.3	5.8	1.3
下 肢 機 能	105	100.0	12.8	44.1	41.5	1.5
体 幹	15	100.0	26.6	37.3	34.4	1.7
脳病変上肢機能	2	100.0	18.5	75.0	6.5	0.0
脳病変移動機能	3	100.0	27.2	12.5	13.0	47.3
内部障害者計	59	100.0	62.1	34.3	0.5	3.2
心 臓 機 能	30	100.0	50.4	47.7	0.4	1.6
腎 臓 機 能	23	100.0	93.2	0.9	0.4	5.5
呼 吸 器 機 能	2	100.0	5.3	91.6	1.8	1.4
膀胱・直腸機能	4	100.0	1.5	96.4	0.7	1.5
小 腸 機 能	0	100.0	3.1	85.2	0.0	11.7
重 複 障 害	15	100.0	33.6	37.6	10.1	18.7
不 明	5	100.0	18.7	18.3	36.5	26.4

(2) 年齢別

常用雇用の身体障害者を年齢階層別に構成比でみると、40～44歳層から55～59歳層にかけて50%を超す構成比となっており、この年代での雇用が多いことがわかる。これを一般の常用雇用労働者と比較してみると、一般の常用雇用労働者の場合20～24歳層と40～44歳層で構成比が高まる形となっており、身体障害者の場合と一般常用雇